



Title	正教会の聖書・祈祷書翻訳 : 亜使徒聖ニコライと中井木菟麿の共同事業
Author(s)	アレクセイ, ポタポフ
Citation	懐徳堂研究. 2011, 2, p. 95-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24635
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「亜使徒聖ニコライ列聖40年記念祭」記念講演会報告

正教会の聖書・祈祷書翻訳

— 亜使徒聖ニコライと中井木菟麿の共同事業 —

アレクセイ・ポタポフ

ご紹介にあずかりました、アレクセイ・ポタポフです。

この度、日本ハリストス正教会教団よりご招待をいただき、亜使徒聖ニコライ列聖四十年記念祭でお話を申し上げます機会をいただきまして、東京の大主教・全日本の府主教ダニイル座下をはじめ、日本ハリストス正教会の神品、信徒の皆様我心より感謝申し上げます。

本日、このような大切なイベントでお話するのは、身に余る光栄であり、また、責任の重いことですが、皆様のお許しをいただき、「正教会の聖書・祈祷書翻訳——亜使徒聖ニコライと中井木菟麿の共同事業」をテーマに、発表させていただきたいと思えます。

正教会とは

さて、本題に入る前に、正教会が初めてという方もい

らっしゃるかもしれませんので、まず一言、正教会とは何か、その由来について簡単に紹介しておきたいと思えます。

皆様もご存じのとおり、日本では「東方正教会」、「ギリシャ正教」とも呼ばれています。正教会は、イエス・キリスト、キリストの使徒たちを原点とし、ローマ・カトリックやプロテスタントとは異なる流れの中で、初代教会、初期教会の伝統を大切に、正しく受け継いでいるキリスト教です。

正教会は、ギリシャ正教会、ロシア正教会、アメリカ正教会、日本正教会など、世界各国にそれぞれ国別の組織がありますが、どの組織も、同じ教え、同じ信仰を持っています。

中でも、ロシア正教会は、十世紀末にビザンチン帝国からロシアに入りましたが、その後、千年の歴史を経て

大きく発展し、今、世界でも最大規模の正教会となっております。

このロシア正教会から、十九世紀、幕末時代に、宣教師ニコライが日本に派遣され、五十年も日本にとどまっておいて、東京の復活大聖堂、ニコライ堂を建てたなど、布教活動に力を入れ、日本の正教会を作り上げました。なお、日本正教会は、正式には日本ハリストス正教会といいますが、「イエス・キリスト」をロシア語で「イイスマ・ハリストス」と発音することに由来しています。

聖ニコライの来日

後の大主教ニコライ、亜使徒聖ニコライが、二十四歳の若い修道司祭ニコライとして日本に渡って、「函館のロシア領事館つき司祭の任務についたのは、西暦一八六一年、文久元年のことです。

今は、モスクワから東京まで飛行機で九時間という時代になりましたが、当時、ロシアの北都、サンクトペテルブルクの神学大学を卒業して、修道士、さらに司祭になったばかりのニコライは、ペテルブルクを発つてから、自ら馬車を駆ってシベリアを横断し、日本の函館に着くまで、一年ほどかかりました。

というのも、途中のニコラエフスクに着いて海を渡るうとしたとき、すでに寒い季節に入っていたので、船がなく、この港町で冬を過ごすことになったのです。

日本の国民に救いの教え、正教を伝えたい、という熱い思いに燃えていた若いニコライには、ちょっと拍子抜けだったかもしれませんが、災いを転じて福となす、後々の布教活動の方向を決めたともいえる出会いが待っていました。アメリカ、シベリアの使徒と呼ばれる、有名なロシア人宣教師、主教インノケンティとの出会いです。

主教インノケンティとの出会い

主教インノケンティは、それまで三十年にわたってアラスカ、カムチャツカ、シベリアの各地を伝道一筋に歩んできた、経験豊かな宣教師だったばかりでなく、聖なる人でもありました。

ちようどそのとき、ニコラエフスクに滞在していたので、まだ若手司祭のニコライは、その機会に、先輩の主教インノケンティから多くを学ぶことができました。

「伝道はその国の民を愛し、彼らの文化を尊重することから始まる。ロシアの言葉や文化を押しつけてはならない。いちばん大事なことは、聖書や祈禱書をその国の

資料A 「正教会の聖書・祈祷書翻訳 ― 亜使徒聖ニコライと中井木菟麿の共同事業」年譜

1836 (天保7)	イオアン・カサートキン (後の亜使徒聖ニコライ)、ロシアのスモレンスク郡ベリョーザ村に生まれる。
1855 (安政2)	中井木菟麿、大阪に生まれる。
1861 (文久1)	修道司祭ニコライ、ロシア領事館付司祭として函館に渡来。
1868 (明治1)	最初の日本人信徒、沢辺琢磨がニコライより受洗。
1869 (明治2)	ニコライ、ロシアへ一時帰国。懐徳堂、閉鎖される。
1871 (明治4)	ニコライ、ロシアから石版印刷機を持ち帰り、この頃から初期試訳の朝夕祈祷、聖体礼儀等の祈祷書などを印刷。
1878 (明治11)	中井木菟麿、洗礼を受ける (聖名、パウエル)。
1880 (明治13)	ニコライ、主教に叙聖される。
1882 (明治15)	主教ニコライ、パウエル中井を翻訳の助手とし、共同作業をスタート。
1884 (明治17)	『時課経』、『八調経略』刊行。
1885 (明治18)	『聖詠経』刊行。
1891 (明治24)	東京復活大聖堂 (ニコライ堂) 落成。
1894 (明治27)	『奉事経』刊行。
1895 (明治28)	『聖事経』刊行。
1901 (明治34)	『我が主イイスス・ハリストスの新約』(新約聖書) 刊行。
1902 (明治35)	『大斎第一週奉事式略』、『受難週奉事式略』刊行。
1903 (明治36)	『五旬経略』刊行。
1904 (明治37)	日露戦争、始まる。『三歌斎経』刊行。
1905 (明治38)	日露戦争、終わる。
1906 (明治39)	ニコライ、大主教に昇叙される。
1908 (明治41)	『総月課経』翻訳 (未刊)。
1909 (明治42)	『祭日経』、『連接歌集』刊行。
1910 (明治43)	『八調経』刊行。
1912 (明治45)	大主教ニコライ、永眠。永眠直前まで『五旬経』の翻訳作業を進める。
1913 (大正2)	懐徳堂記念会、財団法人として認可される。
1943 (昭和18)	パウエル中井木菟麿、永眠。
1970 (昭和45)	大主教ニコライ、亜使徒として列聖される。

(※)

- 『時課経』 時課、晩課、早課など、毎日の主要な祈祷文を収録している。
 『八調経』 一週間の曜日ごとの各種奉事に使われる祈祷文を、第一調から第八調まで旋律別に収録。
 『聖詠経』 ダビデ王の詩篇 (聖詠) を収録した祈祷書。礼拝のときに多く用いられる。
 『奉事経』 聖体礼儀等の式次第、祈祷文を収録した祈祷書。聖職者が聖堂奉事の際に用いる。
 『聖事経』 聖職者が、洗礼、婚配、痛悔等の諸機密などを行う際に用いる祈祷書。
 『五旬経』 復活祭から聖神降臨祭 (五旬祭) までの祈祷文を収録している。
 『三歌斎経』 飲食を節制し、身を慎む大斎期間の間に用いられる祈祷書。
 『総月課経』 特定の聖人ではなく、聖人の種類別の奉事等の祈祷文を収録している。
 『祭日経』 主の降誕祭をはじめとする12大祭等、一年の重要な祭日の祈祷文を収録している。
 『連接歌集』 八調経、祭日経、三歌斎経等にある各種カノンのイルモス (連接歌) 等を収録。

言葉に翻訳すること。そうしてはじめて、正教はその土地に根を下ろすことができる……」（川又一英『ニコライの塔 大主教ニコライと聖像画家山下りん』一九九二年、中公文庫）

こう教えた主教インノケンティ自身、伝道先で、文字を持たないアレウト族のためにアルファベットを作って福音書を翻訳するなど、愛と献身の力でめざましい宣教を成し遂げていました。その実績に裏打ちされた言葉は重みがあつて、若いニコライの心に強く響いたはずですから。後に自分も主教になつた聖ニコライは、こう語っています。

「私どもの信ずるハリストス正教は、もとよりロシア教でも、ギリシヤ教でもない、世界の宗教である。ゆゑにギリシヤに伝わつてはギリシヤ教となり、ロシアに伝わつてはロシア教となる。で、日本に伝われば、是非とも日本教とならなければならない。」（明治四十四年、正教神学校発行『ニコライ大主教宣教五十年記念集』、瀧沼恪三郎「日本ハリストス正教会の創立者日本大主教ニコライ師の小伝」より）

また、こうも語っています。

「現代ではいかなる国においてであれ、一般に宣教活動は、口による説教だけに頼っていてはいただけません。

日本では、人々が本を読むことを好み、印刷された言葉を重んじる傾向が強いから、信者や、教えを聴きに集まつた人たちに、何よりもまず、彼らの母国語で書かれた本を与える必要があります。」（ポズニエーフ著、中村健之介訳「明治日本とニコライ大主教」より）

このように、聖ニコライは、自ら伝えようとする正教が「日本教」となるためには、まず、神の言葉である聖書と、人が神に祈る言葉である祈祷書、さらに正教会の教えを説く神学、聖師父などの本を、日本語に翻訳することが、大きな課題であると強く感じて、「印刷された言葉こそ、宣教の心なのだ」と確信したわけです。

日本語を学ぶ

一八六八年十月に、聖ニコライは、主教インノケンティに宛てた手紙で、こう書いています。

『日本語を一生懸命学びなさい』という、主教座下のご忠告は大切にし、守るよう努力してまいりました。意識的に、よく考えた上で、宣教を目指して日本に来たわけですから、なおさらです。最初の数年間、私は日本語を学ばささまざまな方法を試して、たくさん時間を費やしてしまいました。なぜなら、日本語という言葉はど

う見ても、世界でいちばん難しい言葉であつて、外国人は習い始めてから長いこと、解きたい謎のように、これに取り組まなければならぬからです。」(Святитель Николай Японский. Видна Божия воля просветить Японию. Сборник писем. Издательство Сретенского монастыря, 2009)

今、日本語教育は日本国内だけでなく世界各国でも盛んで、外国人が日本語を学ぼうと思えば、いろいろな教材や辞書がたくさんあつて、とても便利ですが、聖ニコライが日本に来た幕末時代には、そのようなものはほとんどなく、ゼロのところから、試行錯誤のやり方で当てるほかありませんでした。

聖ニコライは、函館で過ごした最初の八年間を、もっぱら日本語と日本の研究に当てました。秋田出身の医者、木村謙斎など、学問のある人を教師として熱心に勉強して、「古事記」「日本書記」「日本外史」「大日本史」といった歴史の本や仏教の經典から日本の文学まで、いろいろな本を原文で読みました。

このときの聖ニコライの勉強時間は毎日十四時間にも達して、何人かの教師が代わる代わる書齋を出入りするほどでした。

いうまでもなく苦勞はしましたが、この八年間は苦勞

した時代というより、むしろいちばん楽しく、日本に夢中の時代だったとも伝えられています。

聖ニコライ自身、後にこの時代を振り返って、「私は教師と共に、和文、漢文の本が散らしてある中に座っていた時は、ちょうど魚が水の中を泳ぐように、実に愉快であった」と語っています。(明治四十四年、正教神学校発行『ニコライ大主教宣教五十年記念集』、瀬沼恪三郎「日本ハリストス正教会の創立者日本大主教ニコライ師の小伝」より)

最初の試訳

このとき、身につけた知識をつかつて、聖ニコライはさっそく、聖書の翻訳を試みました。

長縄光男の『ニコライ堂遺聞』では、聖ニコライが元ロシア領事のゴシケーヴィイチに宛てた函館時代の手紙が発表されていますが、一八六七年二月二十二日付の手紙にはこうあります。

「マトフェイによる福音書〔マタイ伝の福音書〕はもう訳し終え、見直しも終わりました。しかし、これを印刷するのは日本語の文法をよく勉強し、翻訳をもう一度見直してからにしようと思っています。」

ポズニエーフ著、中村健之介訳『明治日本とニコライ大主教』という論文でも紹介されている、一八六九年の手紙からも、そのときの様子がわかります。聖ニコライはこう語っています。

「どうにか日本語を話せるようになり、学術書の原文や翻訳文に用いられている文字の書き方のごく初歩を身につけると、わたしはそれだけの知識で直ちに新約聖書を日本語に翻訳する仕事にとりかかりました。しかし、それはロシア語から訳したものではありません。ロシア語の一つひとつの単語に相応する漢字を見つけ出す作業はまだ、とうてい私の力の及ぶところではなかつたし、やっても無駄だったのです。私は中国語から訳したのです。」

北京ミッシヨンの役割

この頃の聖ニコライの翻訳事業には、ロシア正教会の北京ミッシヨンが大きな役割を果たしました。ロシア正教会の北京宣教師団は十八世紀のはじめに設立され、翻訳の分野でも既にかんりの実績を上げていました。

聖ニコライは北京ミッシヨンのロシア人宣教師たちと、緊密に交流していました。一八六七年、聖ニコライは、北京ミッシヨンから、中国語、つまり漢文の新約聖

書、教への鑑、教理問答、朝晩の祈祷などの翻訳書を受け取っています。さらに、一八七二年には、北京ミッシヨンの修道司祭イサイヤが編纂した教会用語辞典を受け取っています。

また、一八八二年には、北京宣教師団長の掌院フラビアが日本を訪れ、奉事経、聖事経、八調経など、北京ミッシヨンによる翻訳の原稿をすべて、聖ニコライに渡しています。これらは皆、聖ニコライの仕事の大きな手助けとなり、叩き台となりました。

このことについては、一八七一年に、聖ニコライ自身、北京ミッシヨンの修道司祭イサイアへの手紙の中で、こう語っています。

「北京ミッシヨンは日本ミッシヨンの母です。北京がなければ、日本のほうは経験がなく、口も利けないのです。」

(Николай Адорятский, перомонах. ИстORIA Пелекинской духовной миссии. Казань, 1887より)

今回の講演に向けて準備するとき、仙台の主教セラフィム座下から、祈祷文として一番最初に日本語に翻訳されたのは「主憐れめよ」という祈りではないか、というご指摘を受けました。実際、「日本正教伝道誌」の第二巻、「函館復活教会の沿革」の章には、ようやく日本人が函館の聖堂に来るようになった時に、まず「主憐れ

めよ」だけを日本語で歌った、と書いてあります。

新しく洗礼を受ける日本人が日本語でお祈りができる
ように、その他の重要な祈祷文を翻訳する作業も始まり
ました。

「天の王」の比較

ここで一つ具体的な例を挙げてみたいと思います。皆
様のお手元にある配布資料をご覧いただきたいと思いま
す。「天の王」という、正教会の代表的な祈祷文が載っ
ている資料です。

この祈祷文は、本日も最初に歌いましたが、正教会で、
お祈りの冒頭や、会合の始まりの時に歌うなど、非常に
よく使われるので、正教会の信徒なら知らない人はいな
いと思います。三位一体の第三位である聖霊、正教会の
用語で言えば「聖神(せいしん)」の恵みが降るように
祈る祈祷文です。

配布資料には五つの訳文がありますが、まず、いちば
ん右の訳文をご覧くださいと思います。東洋文庫所
蔵の『早晚課』という漢文祈祷書から取ったものです。

（在天之主撫恤我等者眞實之神無所不在者無所不充満
者萬善之寶藏者施生活之主祈降臨我等居我等中並潔淨我

資料
目

『大斎第一週間 奉事式略』 1902(明治35)年刊	『時課經』 1884(明治17)年刊	『日誦經文』 1881(明治14)年 第4印行(個人蔵)	『聖體之禮儀』 1877~1880(明治10~13)年 前期頃推定(個人蔵)	『早晚課』 1864年 (東洋文庫所蔵)
<p>天ノ王慰ムル者ハ眞實ノ神在ラザル所ナキ者満タザル所ナキ者ハ、 萬善ノ寶藏ナル者生命ヲ賜フ主ヨ來リテ我等ノ中ニ居リ我等ヲ諸 ノ穢ヨリ潔クセシ至善者ニ我等ノ靈ヲ救ヒ給ヘ。</p>	<p>天ノ王慰ムル者ハ眞實ノ神在ラザル所ナキ者満タザル所ナ キ者ハ萬善ノ寶藏ナル者生命ヲ賜フ主ヨ來リテ我等ノ中 ニ居リ我等ヲ諸ノ穢ヨリ潔クセシ至善者ハ我等ノ靈ヲ救 ヒ給ヘ</p>	<p>在天の主我等を撫恤む者眞實の神在る所 なき者充滿さる所なき者萬善の寶藏なる者 生活を施すの主祈る降り臨んで我等の中に 居り我等の諸の汚を潔淨くせよ至善者我等 の靈を救へ</p>	<p>在天之主我等を撫恤む者眞實の神在る所 所ナキ者満タザル所ナキ者萬善ノ寶藏ナル者 生活ヲ施ス主祈ル我等ノ降り臨ミ我等ノ中 ニ居レ並ニ我等ノ諸ノ汚ヲ潔淨セヨ至善ナル 者我等ノ靈ヲ救ヘ</p>	<p>在天之主撫恤我等者眞實之神無所不在者無所 不充満者萬善之寶藏者施生活之主祈降臨我等 居我等中並潔淨我等諸汚至善者救我等靈</p>

等諸汚至善者救我等靈)」

この『早晚課』というのは、北京ミッシヨンのロシア人宣教師、掌院グーリイ・カルポフが翻訳した、朝晩のお祈りを集めたものです。一八六四年、つまり聖ニコライが日本に来て三年ほど経った頃に、中国で出版されています。一八六七年に、聖ニコライが、北京から送ってもらった朝晩の祈祷とは、これに当たると思われます。

当然、訓点が施されていない漢文、白文となっています。白文のまま唱えれば仏教のお経のようになってしまいますので、声に出して読むのを遠慮させていただきませんが、これと比べる形で、その直ぐ左にある和文を読みたいと思います。これは聖ニコライが翻訳して、ロシアから持ってきた石版印刷機で刷った祈祷書、『聖体之礼儀』の一部です。

では、読んでみます。

「在天ノ主我等ヲ撫テ恤ム者眞實ノ神在ラザル所ナキ者満タザル所ナキ者万善ノ寶藏ナル者生活ヲ施スノ主祈ル我等ニ降り臨ミ我等ノ中ニ居レ並ビニ我等ノ諸ノ汚ヲ潔淨セヨ至善ナル者我等ノ靈ヲ救ヒ」

この二つの訳文を一字一句比べてみると、聖ニコライの訳文は、北京ミッシヨンの訳文をほぼ忠実に訓読していることがわかります。つまり、聖ニコライの最初の頃

の翻訳というのは主に、漢文を訓読していく作業だったわけです。この仕事は、仙台藩の漢学者・真山温治や、最初の日本人信徒・沢辺琢磨など、日本人の助けを得て、進められました。

この二つの訳文をさらに比べてみると、今も日本ハリストス正教会だけで使う特殊な用語の一部は、北京ミッシヨンのロシア人宣教師たちが考えた訳語にさかのぼっていることもわかります。

例えば、「眞實ノ神」で、「神」の字を「しん」と読ませて、一般にいう「靈」の意味で使うのがそうです。この「神（しん）」、特に聖霊のことを「聖神（せいしん）」という言い方は、正教会特有の用語として定着して、後々の翻訳にも統一して使われ、現在に至っています。

これまでの翻訳に不満を抱く

このように、聖ニコライはどんどん、四福音書、聖使徒行実、使徒たちの手紙、教えの鑑、朝晩の祈祷などを漢文から日本語に訳して、早くも大きな成果を上げたように見えました。が、翻訳を進めれば進めるほど、次第にその質に大きな不満を抱くようになります。

聖ニコライは、先ほど引用しました一八六九年の手紙

の中でこう書いています。

「作業は非常に早く進みましたが、だんだん中国語のテキストを知るに連れて、やがてそのテキスト自体が信頼できないものだとわかり、幻滅しました。そこで、中国から、新約聖書の他の翻訳を取り寄せてみましたが、一方の翻訳は直訳であって、表現が粗削りで、意味不明なところもたくさんありました。もう一方の翻訳は飾り過ぎていて、原文を完全に言い換えたり、多くの単語を落としたり加えたりしていました。」

このとき、聖ニコライは、他人の翻訳に頼ることなく、自力で一から翻訳しなければならぬと、強く思ったのでしよう。言うまでもなく、外国人である自分ひとりにはそのような作業はとうていできず、然るべき知識があつて信頼できる日本人が助けってくれることがどうしても必要だったので、適任者との出会いを心待ちにしていたはずです。

そして、やがてその出会いは与えられました。懷徳堂の漢学者、中井木菟麿との出会いです。

懷徳堂と中井木菟麿

ここで、懷徳堂と中井木菟麿について、一言触れてみ

たいと思います。

皆様もご存じのとおり、懷徳堂は江戸時代の享保九年、一七二四年に、大阪にできた学問所で、大阪大学の始まりの一つとなっています。

懷徳堂では、儒学を中心とした中国思想が教えられ、富永仲基（とみなが・なかもと）、山片蟠桃（やまがた・ばんとう）など、多くの人材を輩出しました。学問の内容は主に『論語』や『孟子』など、中国古典でしたが、自然科学の分野でも大きな実績を残しています。

この懷徳堂は、中井翫庵（しゅうあん）がつくって、中井家が経営していましたが、明治二年、新しい政府の改革によって廃止され、百四十年余りの歴史を閉じることになりました。中井木菟麿が十四歳の青年だった時のことです。

自ら懷徳堂で学問を修めて育つた中井木菟麿は、後にこの時のことを振り返って、「子供心に刻まれた愁い、痛み、やるせない思いは、大きくなつても諦めることができなかつた」と語っています。（主教セラフイム『東京復活大聖堂が建てられた時』正教時報社、二〇〇二年）
このような中井木菟麿は、後にも懷徳堂の再建を強く望み、そのために力を尽くしました。

懷徳堂が廃止された十年後に、中井木菟麿は正教会の

信徒になりました。大阪にはすでに明治七年、ペトル笹川によって伝道が始められていたので、教えを聴く機会があつて、大阪正教会最初の信徒三十三名のうちの一人として洗礼を受け、パウエルという聖名、クリスチャンネームをもらいました。

それから間もなく、自給伝教者となつて正教伝道に身をささげます。明治十三年には、播州、加古川に引越して、加古川、小野町、三木町、姫路などで教えを伝えました。

聖ニコライ、中井を招く

聖ニコライは、有名な懷徳堂の家系に属する中井木菟麿が正教会の信徒になつたことを知つたとき、これだと思つたのではないでしょうか。明治十五年、関西地方の教会を巡回して加古川に来たとき、中井木菟麿の豊かな学識を見込んで、中井に街を案内してもらう途中、こう口にしました。

「あなたには大切な仕事があるから、伝道をやめて東京に来なさい。」

昭和十七年九月号の正教時報にある「大主教ニコライ師と私」という記事では、中井はこう振り返っています。

「どういふことをするのかわからないで、言うとおりにしたら、九月の初めから、直ちにニコライ師の書齋に呼ばれて、翻訳を書き取る仕事につかされた。大切な仕事とは正教新報の編集くらいだろうと思つていたが、何の予告もなく突然、筆をとらされたので、実に案外であつた。」

そのときの中井に戸惑いもあつたのでしよう、聖ニコライが彼に向けた、次の印象深い言葉が残っています。「あなたは神様に釣り上げられたのだから、どんなに

こうしても脱出することはできない。」
こうして、西暦一八八二年、明治十五年九月から、亜使徒聖ニコライとパウエル中井木菟麿の共同翻訳事業がスタートするわけです。

聖ニコライの日記

この事業を語るにあたって、この上なく貴重な資料があります。聖ニコライの日記です。

この日記は、大主教ニコライが亜使徒として列聖された一九七〇年の九年後、一九七九年に、サンクトペテルブルクの歴史古文書館で眠っていることが、中村健之助氏によつてつきとめられました。長い準備を経て、まずロシア語の日記全文がロシアで出版され、また、日本語

に翻訳されて日本でも出版されました。

聖ニコライの日記は四十年間にわたって、膨大な量となっています。異国で生きる聖ニコライにとって、この日記が、心を打ち明ける友だったのです。

日記の中には、聖書、祈祷書の翻訳についての記述もたくさんあります。これから、聖ニコライ自身の「生の声」として、二〇〇七年に教文館から出た、中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』を引用しながら、お話を進めてまいりたいと思います。なお、日記の中の日付はロシアの旧暦と日本の新暦と、二通りありますが、新暦のほうだけ引用させていただきます。

中井と共に翻訳を始める

一八八二年の覚書に、聖ニコライは「パウエル中井とともに奉神礼の翻訳を始めた」と、短く書いています。

「奉神礼」とは、「神を奉ずる礼」と書いて、正教会で行なわれる祈祷や儀式、礼拝のことです。

二人の仕事は、まず、この奉神礼に使う祈祷書の翻訳からスタートしました。

なぜ、聖書の翻訳を最初にしなかったのか、という質問が出てくるかもしれません。

そのときは聖書といえは、漢文聖書として米国聖書会社のものが最も質の良いものとされ、正教会でも広く使われていました。一八八九年に、聖ニコライとパウエル中井はこの聖書の人名・地名に、ロシア語の読み方に基づいたルビをふって、正教会独自の「訓点新約聖書」を出しています。

このように、とりあえず使える漢訳聖書があったので、聖ニコライは聖書を日本語に翻訳する、本格的な仕事を後にして、まず正教会の教会生活に欠かせないお祈り、奉神礼に使う祈祷書の翻訳にとりかかったわけです。

配布資料の年譜にもありますが、聖ニコライとパウエル中井は一緒に仕事を始めてから三年で、さっそく『時課経』、『八調経略』、『聖詠経』を翻訳して、出版しています。

「天の王」の比較、その二

ここでもう一度、「天の王」という祈祷文の配布資料をご覧くださいと思います。

右から三つ目の『日誦経文』と、四つ目の『時課経』の訳文を比べてみたいと思います。『日誦経文』は中井が翻訳の仕事に参加する前の訳文で、『時課経』は聖二

コライと中井の共同作業による訳文です。

まず、『日誦経文』のほうから読んでみます。

「在天の主我等を撫恤む者真実の神（しん）在ざる所なき者充滿ざる所なき者萬善の寶藏なる者生活を施すの主祈る降り臨んで我等の中に居り我等の諸の汚を潔淨くせよ至善者我等の靈を救へ」

これは、先ほど読み上げました、石版印刷の「天の王」とほぼ変わらない訳文となっています。日本語としてよみ読みやすくなるように、細かい直しが施されているだけです。

つぎに、『時課経』のほうを読ませていただきます。

「天ノ王慰ル者ヤ眞實ノ神在ラザル所ナキ者滿タザル所ナキ者ヤ萬善ノ寶藏ナル者生命ヲ賜フノ主ヤ來テ我等ノ中ニ居リ我等ヲ諸ノ穢ヨリ潔クセヨ至善者ヤ我等ノ靈ヲ救ヒ給へ」

後者のほうは信者の皆様が慣れていらっしやる訳文となつていますが、この二つを比べてみますと、『時課経』では、パウエル中井との共同作業によって、訳文が大きく見直されていることがわかります。

新しい翻訳は、訳語の正確さの面で一段と質が高くなつているといえます。一例だけ挙げてみたいと思います。冒頭の言葉は、「在天の主」だったのが「天の王」

となつたのですが、原文のギリシャ語、または教会スラブ語訳にあたってみますと、ギリシャ語では「バシレヴー」、スラブ語では「ツァリユー」、つまり「王様」「王」という意味の言葉が使われています。逆に、日本語で「主」といえば、ギリシャ語の「キリーエ」、スラブ語の「ゴースポジ」の訳語として定着しましたので、ここでは直す必要があつたのです。

翻訳は日本語の面でもよくなりました。たとえば、「生活を施す」という、日本語としてやや不自然な言い方は「生命を賜ふ」と直されています。また、漢学者の中井の判断だったのでしよう、「けがれ」の漢字が、よりふさわしいと思われる、難しい漢字に直されています（「汚」↓「穢」）。

奉神礼の翻訳が進む

一八八五年六月十九日の日記に、聖ニコライはこう書いています。

「聖詠経を印刷に回した。これから何を翻訳しようか。三年後に聖堂が完成した時に、正教の聖堂でどこでも、奉神礼は正しく行なわなくてはならないということを考えておくなくてはならない。そのために必要なことは、

三年がかりで三歌斎経と五旬経（これら二つを併せれば年間の奉事の三分の一を成すことになる）、さらに祭日経と総月課経とを留意しておくこと。」

ところが、それぞれ何百ページ、何千ページにもなる、膨大な祈祷書のことで、なかなか計画どおりには行きませんでした。

聖堂、つまり東京の復活大聖堂、ニコライ堂が完成したのは、その六年後、一八九一年のことです。そして、すでにあつた翻訳を土台に、まず一八九四年に『奉事経』、一八九五年には『聖事経』が翻訳され、出版されました。最初に翻訳しようと思つていた三歌斎経、五旬経、祭日経、総月課経が出来るのは、ずっと後のことです。

『奉事経』と『聖事経』が出た後は、聖ニコライとパウエル中井はようやく新約聖書の翻訳にとりかかりました。二人の翻訳事業を代表する仕事です。

聖ニコライの日記に基づいて、その翻訳がどう進められたか、また、どんなに大変だったか、二人の仕事のプロセスを追体験する意味でも、順を追つて見ていきたいと思ひます。

新約聖書の翻訳、スタート

明治二十八年、一八九五年九月二日の日記に、「夕方六時から、わたしとパウエル中井は自分たちの仕事、新約聖書の翻訳にとりかかった。マトフェイ（マタイ）による福音書から始めた」とあります。

次の日、聖ニコライはこれから翻訳にあてる時間を決めて、こう書いています。

「朝は七時三十分から十二時まで、夕方は六時から九時まで、パウエル中井と聖書の翻訳を行なう。これを毎日の規則とする。」

つまり、午前は四時間半、午後は三時間、一日七時間半も、二人の翻訳の仕事にあてられたわけです。

聖ニコライはときとして、そのひたむきな伝道への熱い思いゆえに、日記に厳しい言葉を残しています。最初の頃、翻訳の表現を練つて、ゆつくり考えようとする中井となかなかペースが合わなくて、二週間後の九月十六日の日記で、こうこぼしています。

「翻訳の進みがとても遅い。やつとこのことでマトフェイによる聖福音の十二章までたどり着いた。もつと早く進めることはぜつたいに不可能だ。中井はとてもゆつと

りと作業をするので、わたしはもう堪えられない。」

十月十日、マトフェイ伝の翻訳が終わって、聖ニコライはこう書いています。

「マトフェイによる聖福音は、マトフェイ上田の翻訳が大いに役に立った。上田の言葉の使い方はとても上手なので、半分は彼の翻訳を写すことになった。」

「マトフェイ上田の翻訳」とは、日本ハリストス正教会の翻訳者の一人、上田将(すすみ)が、一八九二年に出した『馬太(マトフェイ)伝聖福音』のことです。聖ニコライとパウエル中井の翻訳に先立つ形で、単行本として出版された日本正教会初の日本語聖書です。

年が変わって一八九六年一月五日、降誕祭の前日の聖体礼儀、それから降誕祭の晩禱で、初めて、二人の翻訳した福音が朗読されました。この日の日記には、こうあります。

「翻訳の出来が自分にわかるように、また他の人からこの翻訳の意見を聞くために、そして印刷して間違いがそのままにならないうちに、直さなければいけないとわかった間違いを直すために、これからいつもこれを読むことになるだろう。」

使徒書簡の翻訳

その年の復活祭の後、二人は使徒たちの手紙の翻訳にとりかかりました。比較的やさしい言葉で述べられている福音書に比べて、使徒たちの手紙は修辭法や文法が難しく、また神学的にも深く難しい内容が盛りだくさんなので、翻訳が大変でした。

中でも、聖使徒パウエルの手紙が特に難しかったようです。

四月二十七日、ロマ書、ローマの信徒への手紙から始めましたが、聖ニコライはこう嘆いています。

「最初の一節から八節までは、文法的に難しく歯が立たない。また、文法をしっかりと訳さないと、言葉の意味や美しさや力が弱まってしまふ。どうすればよいか。」

そして、「聖使徒パウエルよ、助けたまえ」と祈っています。

エフェス書の翻訳に入って、仕事はさらに難しさを増して、九月二十八日の日記に、こうあります。

「エフェス人に達する書の第一章を、わかりやすい日本語にするというのが、いまだに乗り越えられない壁である。わたしは絶望しかけている。すっかり元気がなく

なり、両手はだらんと垂れさがり、きようは翻訳を投げ出してしまった。もうほんとうにぐったりである。」

精神的につらいばかりでなく、二人は体調を崩すこともありました。

十月一日、「夕方はまともに翻訳をすることができなかつた。中井は歯が猛烈に痛み出し、わたしはまたインフルエンザにかかったような感じだ」と、日記にあります。それでも、その日、「かろうじてエフェス人に達する書の第一章を訳し終え」ることができました。

体がなおっても、翻訳の難しさは相変わらずでした。十月十六日の日記です。

「コロサイの信徒への手紙の第一章と第二章を翻訳するのはなんと難しいことだろう！　きのうときょうで、ほとんど倒れそうになりながら、やっと第二章の九節までたどり着いた。しかし、きわめて残念だ。翻訳はとて満足はいくような出来ではないのだ。まさに比類なきでさばえの黄金の鎖を、ちぎって小さな不細工な破片にしてしまったようなものだ。」

「比類なきでさばえの黄金の鎖」とは、聖使徒パウエルの言葉のことです。聖使徒パウエルの書く文章は特に凝っていて、とても長い文がよく出てくるので、それを美しい「鎖」にたとえているわけです。

それを日本語にする場合、日本語の文法上、そのまま一つの文にするのは無理なこと、どうしても、ずらずらと何節も続くものと文を切つて、一節、多くても二、三節を一つの文にせざるを得ないので。聖ニコライはそれを、原文を損なうことだ、「無知な、かつ冒険的な」ことだと書いて、心から嘆いているわけです。

一八九六年十二月七日、黙示録で、とりあえずの翻訳は終わりました。その結果をまとめて、聖ニコライはこう書いています。

「毎日よい翻訳にするためにすべての力を使い果たし、それでも毎日、『きょうも満足な訳ができなかつた』と思つたものだ。」

聖ニコライとパウエル中井は、原文をしつかりと理解し、それを日本語でわかりやすく言い表すために、ありとあらゆる方法を使いました。二人の前には、新約聖書の三つのギリシャ語版、二つのラテン語版、教会スラブ語版、ロシア語版、英語版、フランス語版、ドイツ語版、三つの漢訳版、日本語版、さらにロシア語と英語の聖書注釈書、そしてありとあらゆる辞書がありました。

聖ニコライはこう続けます。

「毎日毎日、ほとんど毎時間これらを掘り返して調べたものだ。細心の注意をつくして翻訳したのだが、たい

して良い出来栄えではない」と、厳しく評価するとともに、こうも書いています。

「それでも、われわれの翻訳は、少なくとも明快であるし、できる限り（原文の）考えの筋道を壊さないようにしている。むろん、できる限りであるが。たとえば、使徒パウルの語る長い長い文の場合、どうしてもいくつかの部分に分けざるを得ないし、そうすればもともと言葉や考えの流れといったものを守ることは、どうしても不可能になってしまう。」

そして、「神よ、こんどは可能なかぎりの修正作業に力を貸したまえ！」と、祈っています。

校正作業

年が変わって、翻訳を見直す仕事か、ふたたびマトフェイ伝から始まりました。「多くのところを新たに訳さねばならない。以前の訳には満足がいかない」と、一八九七年六月九日の日記に書いています。

十か月ほどかけてこれを終えると、二人は二度目のチェック、訳語・用語のチェックに入りました。ギリシャ語と教会スラブ語の単語に対する日本語の定訳が、どこでも一貫して使われているかどうかを確認する仕事で

す。教会スラブ語の新約聖書用語索引、コンコーダンスをみながら、訳語を一つひとつ、しらみつぶしにチェックしていく、非常に根気の要る仕事でした。

それは、訳語を最終的に決めて、用語を定着させる仕事でもありました。

一八九八年四月二十八日、この仕事は例の「神（しん）」、ロシア語の「ドゥーフ」という言葉のところまでできましたが、聖ニコライは次のように書いています。

「この言葉は新約聖書のなかで最も難しい言葉で、どう訳してよいかわからない。『神（しん）』という古い言葉を使おうか。」

この「神（しん）」を単語として使うことは、日本語としてあまり馴染みがないことは、聖ニコライもよくわかっていて、こう書いています。

「そんな言葉を使えば、生きている人々のなかにミイラを混ぜるようなことになってしまうだろう。新しい漢字を作るべきか。だが、そうすると、生きている人々の中に自分でこしらえた人形をすえるようなものだ。」

いろいろ迷って悩んだ末に、聖ニコライはこう決断しました。

「最もよい方法は、やはり小さな丸をつけて『神（しん）』という言葉を書くことかもしれない。そうすれば、カミ

ではなくて、シンを意味するということになるろう。」

このように、「神（しん）」「聖神（せいしん）」という用語は、「神」の右肩に小さな丸をつけるという工夫をした上で、正教会の用語として最終的に採用されたわけです。

一九〇〇年四月十九日、聖ニコライは、聖大木曜日に読まれる主の受難の十二福音を、新しい翻訳によって読み上げました。その印象を、日記にこう書いています。

「訳文が気に入らないが、こういうものは決して納得がいかないのがつねである。『ここはいまひとつだから別の言葉にしたいのだが、そうすると概念がうまく表せなくなる』というふうには。」

そこで、聖ニコライは、自分たちの翻訳について、日本人の聖職者、信徒にも相談したりしました。

四月二十六日の日記には、こう書かれています。

「朝、イオアンに因る聖福音〔ヨハネによる福音書〕を、マトフエイ神父や伝教者、信徒たちに朗読して、訳文への意見はないかと尋ねた。わかりやすく正確な訳文だと、皆が認めてくれた。」

それでも、翻訳をめぐる悩み、苦しみは、まだまだ続きます。最大の悩みの種は、相変わらず使徒たちの手紙でした。

五月四日、聖ニコライは書いています。

「ペトルの書の翻訳の難しさには絶望させられる。一晩かけても最初の十節さえ直せない。直し自体、三度目なのだ。いつも、これなら大丈夫、よくわかる、というところまで行きはする。ところが、ふたたび取りかかると、訳文を一目見るなり、使徒ペトルが何のことを言っているのか、わたしたち本人からしてわからないのだ。神よ、なんとこの苦しみが！」

六月九日、まだまだ悪戦苦闘が続きます。

「コロサイ人に達する書、コロサイの信徒への手紙、第一章の翻訳がひどく難しく、絶望してしまう。わたしたちはもう四回も翻訳を行なったのだが、出来ばえときたらいつも、読んでも半分わかるかどうか。だが、ほかにどんな方法があるろう。一続きの文を多くの文に細かく切って、わかりやすくするか。」

最終的には、聖ニコライは、やはり日本語がわかりやすいのを選んで、思い切って文を切ることにして、この難しい問題に決着をつけました。

漢字、文法の点検

十月十日、翻訳文に句読点を打つ仕事が終わって、中

井が「漢字に誤りがないか点検し、まだちらほら残る文法的に疑わしい点についても確認する」仕事に入りました。

そのため、中井は、明治時代の国語学を代表する一流の学者たちに会って、助言を仰いだことが、日記からわかります。

十一月十四日、聖ニコライはこう書いています。

「日本語の面ではつたない翻訳で不満が残るが、日本語文法がこれほどまでに未確立なのだから、しかたがない！ 中井ばかりか、文法の第一人者である大槻でも判断がつかない語形があるくらいなのだ！」

大槻とは、有名な国語学者、大槻文彦（おおつき・ふみひこ）のことです。文部省から日本辞書の編纂を命じられて、「言海」という辞書を作った人です。

この十一月の日記には、大槻文彦、落合直文（おちあい・なおおみ）、林甕臣（はやし・みかおみ）といった国語学者を交えて、文法をめぐる論争する様子が、生き生きと描かれています。

「居ル」という動詞の過去形として「居レリ」という形を使ってもよいかどうか、また、名詞をいくつか続ける場合には、その間にだけ接続詞の「ト」を置くのか、最後の名詞の後にも「ト」を置くのか、そういった文法的な問題で議論が沸騰するなど、興味深いエピソードが

いろいろ紹介されていますが、本日は時間が限られていることもあり、割愛させていただきます。

この作業の結果、「林は、（……）（翻訳が）言葉の面では正確になったと太鼓判を押しした」と、聖ニコライは日記に書いています。

林甕臣（はやし・みかおみ）とは、明治三十年に三省堂から出た『日本新辞林』という国語辞典の編纂者の一人で、独自の日本語速記術をつくった人です。

印刷

最後の手直しと入れ違いに、ついに新約聖書の印刷が始まりました。

ここで、長年にわたって大変な仕事をほとんど休まずにこなしてきたせいも、聖ニコライはひどい脱力感に襲われました。

一九〇一年一月六日、日曜日、「きょうも一日、耐え難いほどひどい気分。ここ何日かずとそうだ！ 心がこんなにうつろで寒々としているのは、おそらく初めてである」と書いています。

そして、神にこう祈ります。「主よ、この気力のなえを克服させたまえ。まだやらねばならぬことがたくさん

ある。奉神礼用の祈祷書を訳してしまわないうちは、棺おけに入るわけにはいかない。」

そうした中、自分たちの翻訳した新約聖書がようやく形となってきたのが、大きな喜びでした。一九〇一年一月十四日、ロシア旧暦の一月一日、聖ニコライはこう書いています。

「雨のしとしと降るどんよりした一日で、新世紀を迎えた。パウエル中井、アレクセイ大越、イアコフ鈴木も新年のお祝いに来て、わたしと中井が訳した新約聖書の最初のゲラ刷りをもってきた。ゲラには心躍る。」

「ゲラ」とは、原稿と引き合わせて、文字の間違いないかなど、最終的にチェックするために、試し刷りしたものです。

ゲラ読みが終わって、一九〇一年四月七日、きれいに印刷された新約聖書の最後のページが印刷所から届きました。復活祭の一週間前、聖枝祭と生神女福音祭が重なった日でした。

この日の日記には、聖ニコライはやっと、こう書くことができました。

「新約聖書の翻訳作業は終了だ。ありがたい。出来の良し悪しはともかく、最後までやり遂げた。」

四月十一日、聖大木曜日の夕方、さっそく、主の受難

の十二福音を、印刷されたばかりの翻訳本によって読み上げました。

日記にはこうあります。

「わたしはすらすらとよどみなく読んだ。というのも、翻訳とたび重なるゲラ読み、それにきょうの新たな準備でその文章をよく覚えていたからだ。」

それから、二人の翻訳した新約聖書は、「日本正教会翻訳 我が主イイススハリストスの新約」と題して、十分な部数が印刷され、日本全国の教会に行き渡りました。

一九〇一年十月四日の日記に、聖ニコライはこう書いています。

「われわれの翻訳した新約聖書を各地の教会や、伝教者、司祭すべてに一部ずつ送った。ようやく神の言葉がわかるようになったと多数の礼状をもらおう。」

長い、長いマラソンを走るような仕事でした。新約聖書の翻訳は、一八九五年九月から始まって一九〇一年四月に本の形で出るまで五年以上もかかりましたが、二人が成し遂げた仕事の難しさを考えれば、非常に短い期間だったとも言えるでしょう。

その後、祈祷書の翻訳を続けることになりましたが、新約聖書の翻訳で決めた定訳を祈祷書にも反映させていきます。

もう一度「天の王」の配布資料をご覧いただきたいと思ひます。

いちばん左の、一九〇二年に出た『大斎第一週間奉事式略』の訳文では、新約聖書を翻訳するときに決めたやり方にしたがって、「神（しん）」の右肩に小さな丸をつけています。

そのほか、呼びかけの「ヤ」を「ヨ」に改め、さらに「生命ヲ賜フノ主」から「ノ」をとって「生命ヲ賜フ主」とするなど、細かい文法的な直しが施されています。

さらには、なかつた句読点が打たれています。

聖ニコライの晩年

祈祷書の翻訳は、聖ニコライが永眠する直前まで続きました。晩年の日記には、それまでの長い仕事を上から眺めて、自分たちの翻訳を自己評価する記述が出ています。たとえば、一九一〇年三月二日、『祭日経』の最後の読み直しをしているときに、聖ニコライはこう書いています。

「わたしと中井はこの翻訳が気に入っている。しかし、全部が全部、皆に理解できるものとは言えない。多くの箇所は、漢字がわかる者なら、それを見て理解するだろうが、耳で聴くと、学問のある者でさえ、どの箇所でも

意味がすぐわかるというわけにはゆくまい。しかし、われわれの訳の場合、目で読む場合にはすべてが明瞭だ。言わんとするところは水晶のように透明で、すべて説明し解釈することができる。」

また、奉神礼に参加して、お祈りの言葉を聞くとときに、「耳と心を開きさえすれば、感動に満たされ、信仰の教義も教えられる」とも書いています。（同年九月二十日）二人の翻訳作業について書いた最後の日記は一九一一年十二月二十六日ですが、こう書かれています。

「正午まで中井と仕事をし、これで祭日前は仕事を休みにする。『五旬経』は、書き写すのが遅れてまだ読み合わせをしていないノート三冊分を除き、印刷に出す用意ができた。」

聖ニコライが間もなく最後の病気になって、これらのノートの読み合わせは、聖路加病院に入院してから、永眠する直前まで続いて、『五旬経』の翻訳を完成させることができました。

結論

このように、聖ニコライと中井木菟磨は、つねに自分たちの翻訳に不満をいだいて、たくさん悩み、苦しみな

がら、日々の地道な積み重ねによつて、膨大な量の聖書、祈祷書の翻訳を成し遂げました。

産みの苦しみともいえる、その苦しみは、聖ニコライ一人のものではなく、二人のものでした。聖ニコライは、翻訳の仕事について日記を書くとき、かならず「わたし」ではなく、「わたしとパウエル中井」と書いています。

また、聖ニコライの永眠まで半年もない、一九一一年九月三十日、モスクワの府主教マカリイに宛てた手紙で、中井のことを高く評価して、「わたしと一緒に祈祷書の翻訳に参加し、皆に尊敬されている学者であり、詩人であると同時に、敬虔な信者である」と書いています。

この二人は力をあわせて、また、それぞれ自分の才能、実力をフルに發揮して、翻訳に取り組みました。

その翻訳は、まさに一つの文字もおろそかにしない、緻密なものがあります。まず、訳語を厳しく吟味して、原文の言葉を一つひとつ正しい日本語に置き換えています。また、原文の文法にも細心の注意を払って、できる限り日本語の文法もそれを反映し、なおかつ日本語としても正しい文法となるように努力しました。

その結果、神の言葉の意味が正しく、過不足なく伝わることに成功しました。さらに、日本語の文体も、神の言葉にふさわしく、格調の高い文語体を選んでいきます。

特にそのリズム感が素晴らしく、お祈りのときに唱えるのにちょうどよいことも、高く評価することができます。

一方、用語や文体が難しく、現代の人にはわかりにくい、ということも指摘されたりします。この点は、ロシア正教会が代々使ってきました、教会スラブ語の聖書、祈祷書も同じです。ロシアには、その難解さをとがめて、教会スラブ語ではなく、現代ロシア語でお祈りをすればよい、と言う人さえいます。

実際、教会スラブ語というのは、現在、日常生活では使わず、もっぱらお祈りの言葉となっています。教会スラブ語に接したことの無いロシア人が初めて教会に来て、お祈りの言葉を耳にしたら、ほとんど何もわからないでしょう。

しかし、この、何が何だかわからないという第一印象に負けないで、教会に通い続け、祈祷書を見て、お祈りの解説を読んで、家で祈祷書にそつてお祈りをしていけば、少しずつその意味が明らかになって、現代ロシア語と同じように、よくわかるようになってきます。

また、聖書につきましても、あらかじめ現代ロシア語の聖書を読んで、その内容をつかみ、さらに正教会の聖師父による注釈書、解説書を読んで、聖書の正しい意味を学んでおいた上で、教会スラブ語の聖書に当たってみ

ると、実に奥深いものがあります。

聖ニコライと中井木菟麿が翻訳した文語体の聖書、祈禱書の言葉についても、同じことが言えるのではないのでしょうか。

二人の素晴らしい翻訳は、日本ハリストス正教会の信仰生活、教会生活の礎となつて、今日に至っています。

時の流れがすでに証明しているように、その翻訳は、決してその場限りのものではなく、今も立派に使われ、これからも長く使われていくでしょう。これこそ、最も高い評価に値することではないでしょうか。

そういつた意味でも、二人が遺した業績は、聖キリルと聖メフオディが、キリル文字を作つて、スラブの諸民族のために聖書などを翻訳した業績と肩を並べています。

本日のお話の最後に、亜使徒聖ニコライとパウエル中井木菟麿の業績をたたえると共に、二人の仕事は、ときには精神的な苦しみさえ伴う、苦労の上に苦労を重ねた、大変な仕事だったことを、改めて強調したいと思います。

その苦労の結果、賜物として、現代のわれわれも、正教会訳の新約聖書をひもとき、いろいろな祈禱書のお祈りの言葉に耳を傾けて、心の糧とすることができます。

最後には、この講演に向けて準備するときに、貴重なご指摘をいただき、さらにいろいろな資料をいただきま

した、仙台の主教セラフイム座下に深く感謝し、お礼を申し上げたいと思います。また、この度、大変お世話になりました、ゲオルギイ松島神父さま、イオアン小野神父さま、さらに名古屋ハリストス正教会のマトシカ・マリヤ松島さんに深く感謝申し上げます。

ご清聴、大変ありがとうございました。